

ばくが子どものころ宇宙の年齢は200億年ぐらいだと言われていた。ハッブルが宇宙が膨張しているのを観測して以来、宇宙の年齢は「ハッブル定数」を根拠にいろいろ書きかえられ、1990年に打ち上げられたハッブル宇宙望遠鏡の観測によりハッブル定数を「80」とし、1995年には宇宙年齢は140億年以上であるとされたが、2003年に打ち上げられたマイクロ波観測衛星WMAPがビッグバン後に発せられた光（宇宙背景放射）を観測し、現在では宇宙年齢は137億年とされている。137億年前に宇宙は生まれた。

この宇宙は「ビッグバン」で始まった、とされている。無から有が始まった、とされている。そんなことをあつさり言われても、なかなか納得のいくものではない。アインシュタインでも最初は恒常的な宇宙をイメージしており、自分が導き出した一般相対性理論の解として、宇宙は膨張または収縮をしているという結論が得られることに困惑して宇宙定数を導入して静かな宇宙というイメージを壊そうとしなかった。しかしハッブルの宇宙は膨張しているという観測結果を知って宇宙定数を撤廃した。それでも彼は「神はサイコロを振らない」と言って量子が確率論的に振る舞う量子力学を最後まで認めなかった。

宇宙は膨張している。すると時間を遡ると宇宙はちいさな一点に集束する。この宇宙がはじまった時間ゼロの点を「ビッグバン特異点」と呼んでいる。特異点とは密度が無限大の点から先はどこへも行けないと考えられていたが、実際は南極点を過ぎてぐるっと回り込み、北の方向に進むことができる。どこか特別な穴に落ち込むようなことはない。歩いている人は南極点（ビッグバン特異点）を通り過ぎていることすらわからない。（ホーキングが虚時間を導入することで）この南極点は他のどの点とも同じであり、特別な点（特異点）でなくなる。

もつとも、前にも書いたことがあるのだが、現在は、超ひも理論が優勢で（この理論で南部陽一郎がノーベル賞をもらったのは記憶に新しい）、この世界は10次元とか11次元とかの高次元の中で震動している1次元のひも³⁵10mというおおきさ。原子のおおきさは10⁻¹⁰mで構成されていると説明される。その高次元理論から発展したブレーン宇宙論では、宇宙は数多く存在し互いに影響を与えながらもそれぞれ独立している状態にあり、「我々の宇宙」のブレーンと「あちらの宇宙」のブレーンがぶつかったときにビッグバンが起こっているとしている。この論は、宇宙がただ一点の無から生じたというパラドックスを解消している。この理論では特異点は出てこない。（エキピロティック宇宙論）。

これから先、宇宙のはじまりと終わりがどう読み解かれるのか、興味は尽きないが、そんなに悠長には構えていられない歳だからすこし残念である。

この世界の一般的な物理法則はニュートンの物理学で説明がつく。光が関係したり、強い重力場などが関係してくるとアイ

で、物理法則が適用できない点のことで、あのホーキングは「宇宙には始まりがある」と言ったが、同時に、「宇宙には境界がない（特異点がない）」と虚時間を考案した。虚数とは二乗するとマイナスになる数のことだが、ホーキングは、宇宙が虚時間から始まれば特異点はなくなる、と言っている。特殊相対性理論でマイナスになるはずの時間が虚数になるとプラスになり、特異点は解消される。

「ホーキング、宇宙を語る」（早川書房）の中でこう語っている。「実時間では、宇宙は時空の境界をなす特異点にはじまりと終わりをもっており、そこでは科学法則は破れる。だが虚時間では特異点あるいは境界はない。だとすると、虚時間と呼ばれるものが本当はより基本的なもので、実時間と呼ばれているものは、われわれが考えている宇宙像を記述する便宜上、考案された観念にすぎないのかもしれない。」

実時間とは、われわれ人間が考案した便宜上の観念かもしれない、とドキッとするようなことを平気で言っている。ホーキングの本は詩的想像力を刺激してくれる言葉でいっぱいだ。

特異点の解消を簡単に説明するところいう説明もできる。

地球の上には経度線がある。経度線は南極と北極のところまで一点に集束している。たとえば、南極の一点（南極点）をとらえてその地点がビッグバンの地点と考える。赤道の方に向かって地球は拡大している。その姿にはビッグバン以後膨張する宇宙のイメージが得られる。ビッグバン特異点とは、その南極点、経度線が集束している位置に喩えられる。いままではその地点なければならなかった。

極小の世界を記述する量子論の世界は「人間の観測には超えられない限界がある」という世界だということを知るようになる。ホーキングは虚時間を導入して宇宙のはじまりの特異点の解消を図ったが、量子力学理論ですべてに特異点は解消しているようなものだ。

「すべての状態を不確定だとする」量子論の立場では、無とはいっても、何もない状態、ということはない。エネルギーと時間の不確定性により、極めてみじかい時間であればエネルギーが「ゆらぐ」ことが可能である。物理の法則にはエネルギー保存の法則があり、その保存の法則をクリアするため、ここでは粒子と反粒子が対になって生まれたり消えたりすることを繰り返している。大きなエネルギーが寄せては返す波のように現れては消える、という状態を繰り返している。つまり、無の世界とはごくわずかな「ゆらぎ」がある不確定性の世界である。そして、その「ゆらぎ」が宇宙誕生の種になっている。無の状態の中ではその「ゆらぎ」のためにいくつもの宇宙が生まれては消えている。その「ゆらぎ」の中からこの宇宙が生まれた、とされる。（興味のない方は聞き流してください）

この宇宙が生まれて10⁴⁴秒後から10³⁴秒後の間に真空に満ちていた真空のエネルギーが「インフレーション」という膨脹を起こ

し、宇宙は一挙に¹⁰100倍に膨らんだ。そして、宇宙誕生から¹⁰34秒後にビッグバンがおこり、真空のエネルギーが熱エネルギーに転換され宇宙は超高温で高密度になった。このとき光や物質が誕生し、そのときの光が波長の伸びた電磁波（宇宙背景放射）となって温度が下がった状態2・7度K（絶対温度（摂氏マイナス273度）プラス2・7度）で宇宙を飛びかっている。それを観測した結果、宇宙は137億年前に生まれたと言われている。

その宇宙の中の小さな系、太陽系の中、ほくたちが棲んでいる地球は約46億年前に生まれたらしい。

その地球についてごろ生命が誕生したのか。今のところ、シアノバクテリアという数ミクロンぐらいの単細胞の原核生物（細胞核を持たない生物）が38億年くらい前に存在していたということがわかってる。

ヨーロッパ社会では、人は神の手によってつくられたと言い含められてきたが、ダーウィンが「種の起源」を発表して、そのむかし人間はサルだったと言いはじめたとき、イギリス国教会のサミュエル・ウィルバフォース主教は「あなたの祖先はサルだということだが、それは祖父方なのか、祖母方なのか」と揶揄した。なかなかいい揶揄だとおもう。

時代が進んで、つい最近までは、ヒトなど脊椎動物の祖先はホヤ類だといわれてきたが、最新の研究では、近海の浅いところに生息しているシラウオみたいな4〜5センチぐらいの透き通った魚ナメクジウオだとわかった。ナメクジウオといっても、あのぬるぬるのナメクジの仲間ではない。ちいさな魚だ。ナメ

クジに似ていたらちよつと嫌な気がするが。

ナメクジウオのゲノムのおおきさはヒトの約6分の1で、約2万1600個の遺伝子を調べていったらナメクジウオからホヤに変わっていったものと、脊椎動物のほうに変わっていったもの、両方が出てきた。それが5億2千年前のことだ。

ヒトと呼ばれるものが地上に登場したのが400万年ぐらい前で「猿人」と呼ばれた（アウストラロピテクス類など）。200万年ぐらい前に「原人」が登場し（ジャワ原人や北京原人など）、50万年ぐらい前に「旧人」（ネアンデルタール人など）、そして20万年ぐらい前にほくたちの直接の祖先である「新人」（クロマニヨン人など）が登場してくる。

1万2000年ぐらい前、中国で稲作が始まり、メソポタミア地方では7000年前に麦作と牧畜が始まっている。そのころから、狩猟や採集でその日暮らしの生活をしてた人びとは計画的な食糧の収穫ができるようになった。また、そのころには磨いて加工した石器、磨製石器が登場し、新石器時代が始まっている。というわけでヒトは、採集という生き方をしていた草食動物、狩猟という生き方をしていた肉食動物などの不安定な生活圏を生きていたそれらの生物とは別の生活圏を持つようになった。

食糧の計画的な生産は人びとの生活を安定させ、かつ、農業技術も徐々に改善され、皆が皆、食糧の生産に励まなくてもいいような社会になると、違う役割で生きていく人たちが現れる。神に仕える神官が出てきたり、自分たちの集団を他からの攻撃から守るための戦士や、農耕機具や衣服を担当する職人なども生まれ、しだいに権力構造が形成されていき、階級が構成され、

自分たちの集落を守るための城壁を造り、都市国家が形成され、都市国家の支配者は農民から租税を収集するようになり、その記録のために文字が発明され、文明が生まれていった。

紀元前3500年ごろにメソポタミア文明が生まれ、エジプト、インダス、黄河、と四大文明が生まれたのはこの食糧の安定的な生産のおかげであると言っている。このへんは詳しくないので、文明が生まれたのは他の要素もある、と反論されるかもしれないが）

長いあいだ文明はゆるやかな発展を遂げていた。言ってみれば地球環境のもとで、それに逆らうことなく、地球環境と共存して発展していた、と言っている。

それが劇的な変化をみせるのが、18世紀後半のイギリスから始まった「産業革命」だ。農耕牧畜中心の社会が機械工業産業の社会に劇的に変化していく。

日本に置き換えれば、明治維新だろう。江戸時代の人びとは、太陽と雨など自然界からのエネルギーを利用してた。自然界と共存しながら生きていた。それが、明治維新という「産業革命」がやってきて、化石燃料などを大量に使用し、自然界のシステムと対立するようになった。

産業革命以後、ヒトは利便さや欲望の追求が最優先され、資本主義という幻がそれらの欲望をますます刺激して、地球環境を食い散らかすことが人類の発展だ、とばかりにここまでやってきた。ほくたちはその日暮らしの狩猟生活から文明を育て、地球環境と共存してきたが、たった200年ぐらい前から、地球環境を食い散らかす文明に突然変異してしまった。様々な見解があ

るが、産業革命以後、人間が地球環境を破壊する速度はそれ以前の10万倍の速度になっている、という科学者もいる。

では、これから先、ほくたちはどこへ行くのだろうか。

ベルクソンは「我々はどこから来たのか、我々とは何なのか、我々はどこへ行くのか」と問いをたて、人間の生命原理を考察したが、そう簡単に答など出ようはずもない。（ちなみにハイデガーは人間は何のためにここへ来て、これから先どこへ行くのかわからない不条理な存在である、といている）。

まあ、ベルクソンの生きた西洋の社会はキリスト教社会が基本なので、神がヒトをつくり、神と共にあり、神の世界に行く、という構図があったのだが、日本では鴨長明の『方丈記』に見られるように「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。」と、連続たる来し方、行く末のなかにヒトの存在が微小のものとして存在を許されている、といった自然観が好まれてるようにおもう。

あまりにも有名すぎてここでほくがいちいち説明するほどのことでもないのだが、ここには「行く川のながれ」は「絶えずして」という不変性と「本の水にあらず」といった変化性の両面が捉えられているし、「うたかた」は「かつ消え」「かつ結び」と書いている。その相反する、ヒトの思わくも予断も排除した自然の成り行きが宇宙を見る唯一の視点である、と言っている。変わらないことと変わることが共存している世界が連続

と流れているのだ。生も死も連続と流れているのだ、という死生観がここにはある。

また鴨長明はこうも書いている。「あしたに死し、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづかたより來りて、いづかたへか去る。」

ヒトの生死は「水の泡」に似ている、と言っている。

泡といつてふと思いだすのは、「泡宇宙論」のことだ。

簡単にいうと、宇宙の中にはあっちこっちに巨大な泡があつて、その内側には銀河はなく空洞が広がっている。つまり銀河は泡の表面に広がっているのだ。ぼくたちの銀河系から4億光年ほどの所に、巨大な泡の膜、銀河の壁（グレートウォール）があり、ぼくたちの銀河系をぐるっと取り囲んでいるのである。泡構造の表面の銀河の中の一惑星の上でぼくたちは小さな生死を営んでいる。鴨長明の水の泡ならぬ、宇宙の泡の上で小さな生死を営んでいる。そして「生れ死ぬる人、いづかたより來りて、いづかたへか去る。」このような死生観を日本人は現在でも懐深くに持っているとおもう。

で、ぼくたちはどこへ行こうとしているのだろうか。

ビッグバン宇宙論では、無のゆらぎから宇宙が始まった。宇宙に存在する質量のいかんで、宇宙はこのままとめどもなく広がっていき最終的には空虚な空間になってしまうのか、あるいは、どこかで膨脹を止め収縮に転じ、宇宙にある全ての物質と時空が無次元の特異点に収束するビッグクランチを迎えるのかどちらかである。まあ、人類がその最期を見届けることなど

38億年経って現在の太陽は格段に明るくなって地表に降りそそいでいるが、そのぶん、海水の蒸発が多くなり、雨となって空気中のCO₂ガスを地表に還元している。この結果、温室効果が減って気温が上昇しない、ということらしい。

ところが現在の大気中のCO₂量は地球史上最低い量で、このままCO₂ガスが減りつづけ、いまの十分の一ぐらいになると光合成生物は生きられなくなるらしい。植物をはじめとする光合成生物が生きられなければその他の生物も生きられなくなる。

そして地球上から生物が消滅する、それが5億年後だという科学者もいる。そう考えれば昨今何かと毛嫌いされているCO₂ではあるが、ほんとうはいいやッだとつくづくおもう。減ってはほしくないものだ、なんておもったりしたが、考えてみれば5億年先の話だ。その前に人類がいるかどうか。いやいや、それ以上に、人類が地球上の生物を根絶やしにしているかもしれない。いやいや、その前に、この20世紀型の文明はあと100年も持たないだろうという科学者もいる。この文明をチャラにした人類は新たな文明を構築するのだろうか。それとも、非文明へと後退するのだろうか。

ぼくは前号で「30%減の文明」ということを言ったが、それは日本の電力の30%をまかなっている原発を完全に破棄した残りの電力で営んでいけるような文明を考えてもいいのではということだ。

最近、政府や企業は、もう原発は無理だから、と自然エネルギーに転換してやっていく雰囲気が出てきているし、マスコミ

不可能だから宇宙の行く末などはちいさな問題である。

太陽系が生まれて46億年経っているという。太陽の寿命は100億年ぐらいらしいから地球はあと50億年ぐらいは大丈夫とおもっていたら、そうではないらしい。それどころか、今の文明がそのまま地球環境を食い散らかしていたらこの文明もあと100年持つかどうか、という科学者もいる。

「暗い太陽のパラドックス」というのがある。

太陽は46億年前に誕生して以来、水素の核融合がつづいてるせいで誕生時から太陽温度は上昇しつづけている。本来ならそれに連動して地球表面の温度も上がりつづけ、灼熱の惑星になつていなければならないはずなのにそうならないのは、CO₂のおかげだと気象学者はいつている。それはこういうメカニズムだそうだ。

46億年前、太陽が生まれたころは今よりも暗く、地球に届く熱も極端に低かった。だから38億年前の地球温度は本来は零下25度くらいのはずだが実際は（地質学的な記述では）現在の平均気温15度ぐらいはあつたらしい、という矛盾がみられる。

それは暗い太陽では海水の蒸発が少なく、雨の降る量が少なく、大気中のCO₂ガスが雨に交じって地表に落ちていくという現象が少なく、一方、火山ガス活動によるCO₂ガス発生量は変わらないので地球表面のCO₂ガス濃度が上昇し、温室効果で地球温度は低下しなかった、というのが「暗い太陽のパラドックス」というのだそうだ。

もそれを煽って、自然エネルギー万々歳みたいな雰囲気になっているが、ぼくはあくまでも、原発で失なう30%の電力減の文明に後退しよう、と提案しているのだ。原発で失った電力を別な手段で回復して、いままでと同じような「欲望消費型」の文明を復活させようと言っているのではない。

とはいっても、人が生きていくうえで駆動力となっているのは「欲望」であるのは間違いない。古今東西「欲望」の力が人を生かしてきたし、「欲望」のない人生などカスみたいなものだ、と、ぼくもおもう。「欲望」のおかげでぼくたちは生きていく力を得られているし、無私無欲だと自負している人でもすくなくならぬ「欲望実現の欲望」に支えられているのは間違いない。だから、ぼくがふと口にした「30%減の文明」とは「30%減の欲望」と言い換えていい。清廉潔白な文明など存在しないことは過去の歴史を見るとよくわかるし、また、清廉潔白な文明など退屈なだけな気がする。善良な人間だけの世間が退屈なように。人間、アクや淀みのなかでかろうじて呼吸ができる生物ではある。

だから、ぼくの考えている「30%減の文明」は、現在の肥大した利便さや欲望を個々がそれぞれ30%減にしてみたら、意外と簡単に達成できるような気がするのだが、どうだろう。

そうは言ったものの、物質的な豊かさ、余剰な欲望が豊かな文明だと考えている人たちに、そんな清潔なことだけを訴えても無駄だろうから、そこはすこし工夫が必要だろう。その工夫をどうすればいいのか、いまのところぼくにはアイデアがない。いいアイデアを持っている人がいたら教えてもらいたい。

あつ、そうとはいってもぼくは、エコロジークとか、自然と共生、地球と共生、とか言っているのではない。「群れず、叫ばず」で生きていきたいとおもっているぼくはどちらかというところ、エコとか共生をスローガンに活動している人たちは苦手だ。エコや、自然や地球との共生、という自分たちが考えていることが地球で生きていくうえで最善の道だ、と声をあげられると、その声の正しさにぼくの細胞がびっくりしてちぢかんでしまうみたいだ。(正しいことばかりでは生きていられない)。ぼくはただだんに「30%減の欲望」という日常を暮らしてみないかと言っているだけなのだ。個々の欲望を30%減にしてみるという方法が一番手っ取り早くて、スローガン無しで実行できるのではないだろうか。

最近「地産地消」ということが言われている。地元で採れた生産物を地元で消費するということだ。江戸時代がそうだった。江戸時代に詳しいわけではないが、江戸はエコトリサイクルの整った近代都市だったらしい。遠くへ運ぶ必要がなく無駄なエネルギーを消費しない考え方だ。これも「30%減の文明」へのひとつの方法だろう。

ところが一方で、東京の銀座に高知の物産のアンテナショップを出して、「都会へ売り込もう」と地産地消で節約したエネルギーをここで使っている。まあ観光誘致とか、付加価値を付けた物産品とか、県や観光協会には思わくがあつてのことだろうし、高知は観光を売りものにしてしようとしている県だから、まあ、仕方ない側面もあるだろう。(昨年は「龍馬、龍馬」とう

るさい一年ではあつたが)

それにいま、日本のTVでは「まい〜」とか言いながら、無駄な食べ歩きを紹介する番組が多くみられるが、番組量が多いということは視聴者がそれを求めていることだろうから、そんな無駄な飲み食いをしてどうするなどというぼくの考えなどは空回りなのかもしれないし、みんな、おいしい物、珍しい物、人の噂にのぼっている物を食べたいというささやかな欲望があるのだろう。食の欲望が満たされると幸福な気分になれるのも人間の特性だし、そんなささやかな欲望が人を生かしているのだから、高知大丸に「はなまるマーケットで紹介された美味しいスウィート展」が来たといつて人が押しかけることは自然な現象かもしれない。

まあ、そう人間、地球環境のことを常に考えながら清廉潔白的に、無欲を貫いて生きていてもつまらないし、ぼくだってそんな人生はお断りだから、それぐらいの無駄を楽しむことは生きていく上に必要なことだろう。30%減の欲望を目標にして楽しむところは楽しんでいきたい。

それはそうとしても、いま日本は、肉や魚、大豆や小麦など海外からほとんど輸入している(海を隔ててやって来るものが腐らないのにはそれなりの理由が、きっと、あるのだろう。防腐剤とか、遺伝子組み換えとか)。関税を撤廃して自由に輸出入をすると政府の方針も決まっている。エネルギーの消費が世界中を駆け巡ろうとしている。ここはひとつ「日本国内での地産地消」で生きていく術を構築できないものかとおもうが、い

ま政府がやろうとしていることは正反対のことだ。食料品の関税だけではなく、工業生産品も関税を取っ払ってしまうのだから、そのほうが日本の儲けに繋がるという発想のようだし、それが世界の潮流だと政府は説明している。そうしないと日本が世界から取り残されてしまう、といっている。ぼくに言わせれば、世界から取り残されてなが悪い、ということだが、そんなことは経済の仕組みがまったくわかっていない文化系の戯言だ、と一笑に付されてしまっそうだ。自動車や電気製品だけを輸出して食料品を輸入しないのは国際的に通用しない、とか、

日本の耕地面積では日本人の腹を満たすことができない、とか、農山村は高齢化で食料の生産自体が危ぶまれている、とか、いろいろ言われるかもしれないが、ここはひとつ、日本人の知恵を絞って「日本国内での地産地消」ができないか考えてみたらどうだろう。

それに、クジラの生息調査とかいって南氷洋まで出かけていてシーシェパードとかいう環境保護団体と険悪な関係になっている。クジラを食べることが日本の文化なら、南氷洋まで出かへずに、日本沿岸にやってくるクジラを捕獲すればいい、とおもうのだが、こんなことを書くと、クジラは知能を持った哺乳類だ、と反論を受けるかもしれないし、それに日本沿岸ではクジラはホエールウォッチングとかいって観光の目玉にされている。「かわいい〜」などと歓声をあげている。ものすごく皮肉的に考えるならば、日本沿岸でのクジラとの「癒し的」な触れあいをアナウンスすることで、南氷洋での食べるクジラの捕獲を

カモフラージュしようとしているのでは、などとおもったりするが、まあ、そこまで水産庁もいびつではないだろうとおもう。

で、いま現在、太地町をはじめ日本沿岸では25カ所でクジラ・イルカ漁がおこなわれていて、まだクジラを食べることが日本の文化として継承されている。ぼく自身は子どものころ以来食べたことはないが、地方によっては鯨肉文化が残っているところもあるだろうから、目に見える捕鯨をおこなって、鯨肉文化をどう考えるかディスカッションすればいい。

『ザ・コーヴ』という映画は見ていないが、人間は他の動物にたいしてやさしくなれたり残酷になれたりする生き物だ。

『ザ・コーヴ』以来、太地町の漁師たちはシートで覆った入り江に追い込んで漁をしているが(NHKのTV番組で見たのだが)、太地町で反対運動をしているシーシェパードの人たちは、「自分たちのやっていることが恥ずかしいから隠しているんだらう」と言い、太地町の漁師たちは「殺すところはだれも見たくないだらう。鳥や牛だってそうだらう」と言いあつてディスカッションどころではなくなっている。

シーシェパードの人たちの妨害は、漁師の車の前に立ちほだかつて進路妨害するとか、札束を見せて「クジラを売れ」といったようなばかばかしい抗議も含まれているのだが、クジラは家族を持つ高等な哺乳類だ、というのが最大の言い分で、太地町の漁師がクジラ漁をやめることだけが目的だから手段は問はずといったところだろう。確信的妨害をしなければクジラを守れない、とおもっているようだ。盗撮したクジラ殺害場面をネットで流して、太地町の漁師たちの神経を消耗させようと

の作戦も繰り返しているが、自分たちの行動だけが正義だ、それ以外は認めない、という態度は、ぼくはどうもなじめない。強硬手段をとらなければならぬほど切羽詰まった事態であったとしても（かれらはそうおもっているだろう）「自分たち以外の意見は排除」という態度はすこしこわい。

先日、ビンラディンが殺害されたが、かれらの一派も自分たちの正義以外は悪だ、と考えていただろうし、アメリカもまた自分たち以外の正義はありえない、とおもっている。そういうことの連鎖が地球上を駆け巡っている。

もつとも話し合いですべてが解決する、などとはぼくも考えてはいないし、憎しみや嫉妬、嫌悪感が人間を動かすのはしかたがない。激しい感情に突き動かされる瞬間もあるだろう。しかし、人間としてのそれらの初期条件をすべて認めた上で、「自分たちだけの正義」を主張する人たちは支持したくない。

沿岸漁業のことに話を戻せば、他の魚も日本沿岸で獲ればいい。それらを食して暮らしていけばいいのではないかと、とおもう。つい最近まで日本人はそういうふうな暮らしをしてきた。一匹何百万円もするマグロを食さなくてもいいのではないかとおもう。

そうすれば「日本国内での地産地消」で何%減かの文明が実現できるのではないだろうか、と経済音痴で文化系おたくのぼくが、まず考えられることはそんなことだが、いろんな知恵を出しあえば「30%減の文明」がなんとなく近づいてきそうな気はする。三人寄れば文珠の知恵と言うではないか。

もつとも、生きていくには効果効率優先ではなく、ささやか

な無駄と、おおいなる無意味を抱え込んでいなければならないことは前提条件だが。

先日、経済界の勝ち組などといわれたホリエモンに有罪判決がおりて2年6ヶ月の実刑、と新聞に載っていた。経済界の勝ち組が過去に発言したことをすこし拾ってみると、「人の心は金で買える」「金があれば何でもできる」「人間はお金を見ると豹変する。豹変する瞬間が面白い」「年寄りも合法的に社会的に抹殺するしかない」（ネットで調べたものなので、100%信用できないかもしれない）。

人間すべて平等だ主義、というような当たり障りのない発言よりも人間が本来持っている「差別感・優越感・拝金主義」のホンネのところが出ていてホリエモンという人がよく分かるし、彼の子供っばさ、青臭さがよく出ている発言だが、経済界の勝ち組の発言はせいぜいこの程度のものだし、刑務所に入る理由も粉飾決算をし、企業の利益を得ようとしたことらしい。金は衣食住が滞りなく満たされるだけでいい、と考えているべくからしたら、なんか「せこい」人間のような気がする。経済の仕組みに精通しているからこのような犯罪が可能だとしたら、経済の仕組みなどわからなくていいとおもう。

で、ベルクソンの問いに戻るのだが、「我々はどこから来たのか」。それは簡単に言える。我々はナメクジウオだった。

では「我々とは何なのか」。悩ましい問いである、というか、そういう問いを猶予しているのが「我々」である。しかし、

三・一一を機に我々が直面しているのは「シュレーディンガーの猫」状態ではないだろうか。

オーストリアの理論物理学者エルヴィン・シュレーディンガーが提唱した量子論に関する思考実験で、猫を一匹入れた箱を用意する。この箱の中には青酸ガス発生装置と、放射性物質が入っていて、その放射性物質が原子核崩壊（アルファ崩壊）を起こせば青酸ガスが発生し、原子核崩壊が起こらなければ青酸ガスは発生しない。また、その原子核崩壊が起こる確率は50%とする、という設定のもので、この箱の中の猫は生きている状態なのか、死んでいる状態なのか、という問いなのだが、まあ、普通の答は原子核崩壊が起こっていれば死んでいるだろうし、起こっていないければ死んでいない、といえるだろうが、ここでの答は「死んでいる状態と生きている状態が重なり合っている」というのだ。

量子論では有名な二重スリット実験の結果、量子（光など）は「波の性質」と「粒子の性質」を持つということがわかっていて、波の性質と粒子の性質が重なり合って量子は存在している。波として観測したときは波の形を、粒子として観測したときは粒子の形を見せる。それをアインシュタインは「神をサイコロを振らない」といつて拒否した。

しかし、神はサイコロを振っていないのだ。

エヴェレット解釈（多世界解釈）では、箱の中の生と死が重なり合っている状態の猫は箱を開けた後も変わることはない。ただ、箱を開けて、猫が死んでいる状態を観察している人物の世界と、猫が生きている状態を観察している人物の世界と、

界が分岐する、ということだ。分岐した後にはどちらかの猫しか残らない。観察者と共に世界が分岐していくだけである。一度分岐した世界はまたミクロの世界で原子核の崩壊が起こると新たな分岐を起こし、次々と世界が並行して存在していく、ということになる。

で、「我々とは何なのか」。青酸ガス発生装置と、放射性物質が入っている箱の中にある猫である。猫の代わりに我々が入っている。いつアルファ崩壊が起こり死ぬことになるのか、それとも箱が開けられるまで生きていられるのか、という存在ではなく、死と生が混ざり合ったまま箱の中に存在している。

では「我々はどこへ行くのか」。箱が開けられたとき死んでいる世界と、死んでいない世界が並行に存在するとしたら、なにも難しいことはない、このままでいい、のだ。しかし、並行世界は互いに情報を交換できない。並行世界があることすら認知できない。互いが互いを知り得ない。だとしたら、我々はどこらかを選ぶ、いや、どちらかの世界に存在させられることになる。箱の中の猫（我々）が死んでいる世界か、生きている世界か。

三・一一。福島原発が事故を起こした世界と、事故を起こさなかった世界が並行に存在しているとするとすれば、我々は前者の世界を生きている。この悪魔のような世界から次に分岐したときはどのような世界に生きることになるのだろうか。原発事故が収束している世界なのか、あるいは放射性物質が充満している世界なのか。「我々はどこへ行くのか」は悩ましい問いである。

甘楽順治さんから詩集『化車』（思潮社）をいただいた。甘楽さんやその世代の若い人の詩を読みながらいつもおもうことは、それらの言葉の立ち姿がいさぎよいということだ。たとえば、人や物が、そう決まりどおり理路整然としているわけではない、とほくもおもい、甘楽さんもそうおもっているとおもうが、ほくの場合、人や物にたいしてある種の論理感があるから、その論理感をズラしながら言葉と向き合うことで、決まりごとを逸脱しようというようなところがあるが、甘楽さんの場合、ハナからそういう論理感を言葉の中に持っているから、人や物のそれぞれの力学のままに言語世界が展開されていて、ほくのように「決まりごとを逸脱したい」と決まりごとをの幻想にとらわれている者には、言葉のいさぎよさに切り削がれている甘楽さんの詩は、表現者と言葉との関わり方の（ほくにはない）側面を楽しませてくれていて、こういうふうに率直に語ってもいいんだな、とつい感心してしまうのだ。

遠いところでわたしのものらしい骨が

ぼさぼさ折れていた

父といっしょに音をたてていて

われわれの

よごれたじかんがむだにつかわれていた

みまわすと

なんだ、どいつも

となりで生きてきたやつじゃないか

まるくりつばにあらわれていた

ころをおもいだすなあ

ひとの骨なんか

なんぼん折ってもへいきだった

遠いところ

というのはない

父はいきつてとなりのひとの傘になった

傘でうまれてもういちど

まっばだかの

あつい傘をかさねたのだ

わたしはまだここにあらわれていない

遠いところしかない

そういうくをつくるのか

でも 負けてしまうくらいなら

わたしはうまれな

わたしのよな遠い骨にはならないのだ

〔父頭〕

父との関係はこのように書かれる。ついでにわたしの時代と父の時代のことさらりと触れられている。

ここには日常的な関係がない。しかし、使われている言葉は日常生活で使われる言葉で、ことさら詩的修辞や暗喩はない。直喩すらない。

以前、甘楽さんと近い若い詩人と話していて、自分たちの世代はもう喩は有効ではない、あるとすればせいぜい直喩だけだ、重要なのは言葉と言葉の接続だ、と聞いたことがあって、即座には納得できないことであったが、若い人には若い人なり

の論理があつて当然だし、それぞれの世代の全力が出ていれば

いい、とおもつたことがあつた。もう4年ぐらい前のことだろう

うか。甘楽さんがそう考えているかどうかはわからないが、やはり

ここには喩はない。喩の快樂に言葉をゆだねていない。言葉

で日常を超越したいというような欲望も感じられない。快樂

や欲望に身を委ねることなく甘楽さんは言葉の直截性だけを信

じているかのようだ。それはそれで甘楽さんの表現方法だろう。

なお、タイトルの「父頭」とは甘楽さんの造語だ。この詩集

でも「爆母」「頭盆」とか造語が多いのだが、造語によって既

成言語からの逸脱をはかろうとしているのかもしれないが、造

語自体が既成語の組み替えでしかない。そのところを甘楽さん

はどうおもっているのだろう。

甘楽さんはつねに甘楽さんの言語が甘楽さんの感性のなかで

ごぞつと生成されて、その生成されたものを、甘楽さんの立ち

姿として表現するのだとおもう。

ほくのような古い人間は古典的な比喻とか、修辞とか、場面

転換とか、省略とか、さまざまな知恵を發揮して、自分の立ち

姿を表現しているのだが、甘楽さんはそういうふうにごちゃ

ごちゃと言葉と戯れないで、じぶんの「まっとうさ」だけを

言っておしまいにしよう、と考えているようだ。

そんな甘楽さんが自分のことを語っている詩がある。なかなか

か微動だにしない立ち姿ではないかとおもう。

むやみにのびているわたしのこともすきだ

よれよれである

すばらしく

みどころのあるやつではないか

すきなかたちでのびきつて

微動だにしない

なんて

飛んできた鳥がほめてくれる

それはすこし虫がよすぎるかもしれない

なんだ、むこうにいつもおなじ虫だったのか

しかると

おもいのほかわたしのやつがのびだして

（それでいい）

あおむけのまま遠くなる

そんなにうすくのびたつて

もうだれもすきになつたりしてくれない

教室のぞうきんみたいなもの

はてしない廊下をふいていくしかない

そこでは空が

しらないひとの夜のほうまで

晴れわたっている

どうしてあんなにのびたわたしになったのか

（おどろいたな）

なんまいもかさなつて

微動だにしない

〔伸仏〕